

やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

大峯奥駈を曲がりなりきな意味があった。それまでは遠くの山並みを風景として見ていたが、その後平地から遠くの大峯山系を眺めると、たちどころに尾根筋の細い道を上り下りしていくことがよみがえた。また右膝が痛むたびに、奥駈道の風景が脳裏に浮かび、倒木更新の生命感あふれる様子や霧が笠原をはい登るすがすがしい光景を思い出した。歩いたことで山と意識がつながり、生きた景観として山を眺められるようになつた。

「山上参り」と呼ぶが、修行者ばかりではなく、

大峯信仰の金丸講



大和郡山市井戸野町の金丸講

=2008年11月、筆者提供

催を触れて回る。夜、ヤドの家に役行者像を祀つた厨子を正面にすえ、背後で、3軒づつが当番になってヤドを務める。

講の当日、町内を子供たちが法螺貝と鈴を鳴らして町内を歩き、講の開

後には不動明王・役行者・

三昧に帰依文

式が持ち回りされてい

た。かつてお話を聞いた

1918（大正7）年生

まれの富田音次郎さん

は、30代に大峯参りをし

た時、帰宅時には家の者

が門で待っていて、魔よ

けになると言つて、同氏

の股の下をくぐったとい

う。第二次世界大戦後、

講の営みは廃れた。昭和

30年代始めに再興しよう

と富田家で営んだもの

の、これを最後に途絶え

たといふ。元は400坪

ほどの講田の年貢を講の

経費に充てていたとい

う。祭奠を納める木箱に

は「南都藤本組」の墨

書が残っていた。

（奈良民俗文化研究所代表）

表

隔週掲載